

久保地啓之氏(元大末建設)

■現場作業が貴重な体験

大学を卒業し、中堅ゼネコンに就職した。すぐに現場に配属された。まず頭をたたかれたのが、何もできないという事実だった。監督は、絶対という雰囲気ではなく、新人社員は作業員が一人増えたぐらいの感覚だった。

このため、最初は作業員と一緒に仕事を手伝わされた。しかし、3カ月後には軟弱な不良学生も筋肉もりの肉体労働者に変身していた。それに毎日現場にいれば徐々に現場が理解できてくる。今になって思っているのは、新人の扱いとしては決して悪い教育ではなかった。

■安易な道を選ばな

このころの思い出で勉強になったことがある。現場は、下水処理場の新設工事だった。監督にかわいがられ、仕事もよく教えてもらった。工事終盤の排水処理の工事だった。処理水は、横を流れる川にヒューム管で放

流する設計だったが、このルートに大きな木があった。当然、根っこはそれに見合う大きなもので、ヒューム管を埋設するためには、これを除去する必要があったが、相当な困難が予想された。

下請けからも立き言をいわれ、放流場所を少しずらすことで、監督に変更を頼みに行った。監督は現場の状況はよく知っていた。今になって考えると、私がどうするか様子を見ていたと思われ、こっぴどくしかられた。

「君の仕事は、図面通りの施工をするのが第一だろう。それに対してこれだけの努力をした

貴重な経験だった若い時代の失敗

のか。努力もしないで安易な道を選んでいたら、将来、駄目な人間になってしまう。君には少しがっかりした」とまで言われた。屈辱感をやる気に変え、頑張った木根っこなんてたいしたことはなかった。本当に良

い勉強をさせてもらった。私のその後の生き方を決めた出来事だった。

もう一つ同じようなことが道路工事現場でもあった。梅雨時でよく雨が降った。現場近くの事務所で独身者は泊まり込んでいたが、若いだけに寝込んだら即熟睡だった。

ある日、かなり強い雨が降った翌朝、現場を見回りに行った時、地元農家の顔なじみのおじさんに手厳しく言われた。「君らは昨夜の雨で、誰も見回りにこなかったな。わしら農家の者は、みんな夜中に自分の畑を見回りに行ったぞ。しよせん君ら

はサラリーマンだな。自分の仕事が大事ではないのか。もっと仕事に愛情を持たなくどうする」。この言葉も胸に突き刺さった。

■技術課を創設し責任者に入社6年目、土木の所長会議で本社に技術部門を設け、現場の技術指導をすべきだと提案した。しばらくして、土木に技術課を新設するということになり、私がその責任者に指名された。部長からは、好きにやってみようとの約束を取り付けた。大

若い時代に手がけた下水処理場増改築され当時の面影はない



つ技術課を宣伝し、仮設計画、土留め、型枠計画、現場のトラブルなどの支援を積極的に実施した。現場技術手帳として「仮設計画の手引き」も出版した。結局、彼らがその後、同社の土木技術の中枢を担っていった。

(社) 土木学会関西支部創立80周年

手ゼネコンの研究室を見学させてもらい、自分の構想を固めていった。目標は、全社の土木技術力のアップだ。土木系社員からアンケートをとり、課員を募集した結果、4人が名乗り出てくれた。彼らの中からとりあえず2人選び、3人で技術課は出発した。しかし、まず一番にしなければならぬことがあった。それは我々3人の技術力アップだった。

■ミスには真っ向から対応現場のミスやトラブルを数多く経験した。手戻り工事は、工事原価の1割近く占める。人間のすることだから完ぺきはあり得ない。むしろミスを犯した時こそ、その人の真価が問われる。逃げてはいけない。失敗やトラブルに対して、真っ向から対応するのが一番確実な解決方法だ。「山より太い猪は出ぬ」という言葉もある。「世の中で起こったことは世の中で解決する」と開き直ることも大事なことだ。また、一人で問題を抱え込まず、先輩や所長らに相談すればいい。



(くぼちひろのぶ) 66年大阪大学工学部構築学学科卒、大末建設入社。現場を経て技術・営業畑で活躍。土木営業部長を務めて退職。その後は、CVVなどボランティア活動に励む。趣味はスキューバダイビングなど幅広い。高知県出身、63歳。

中堅ゼネコンで技術力向上に汗

つたない経験談だが、これから現場を経験する若手土木技術者の参考になればうれしい。